

伊藤セツ著

『山川菊栄研究』

——過去を読み
未来を拓く』

評者：堀川 祐里



本書は、「山川菊栄の『思想的アイデンティティ史』を探る」(486-487頁) 大著で、507頁にわたる論考部分と約100頁にわたる「山川菊栄の年譜と関連年表」から成る。その構成は以下のとおりである。

- 序章 問題意識, 先行研究, 研究方法
- 第1章 出自と時代的背景の考察——初期社会主義, 冬の時代, 大正デモクラシー
- 第2章 受けた教育と思想的基盤——1910年代前半までの到達点
- 第3章 山川均との結婚, 山川菊栄の誕生, 家庭生活
- 第4章 ロシア革命, ドイツ革命を経て(1917-1919)——理論の基礎がため
- 第5章 1920年代前半の山川菊栄——初期コミンテルン・赤嵐会・国際婦人デー
- 第6章 ベーベル『婦人論』の本邦初完訳をめぐる諸問題
- 第7章 1920年代後半の山川菊栄——労働婦人組織と諸問題
- 第8章 1928年以降15年戦争の間の山川菊栄
- 第9章 戦後・GHQの占領下での山川菊栄——労働省婦人少年局退任まで

第10章 戦後「日本社会党」の女性運動への関わりのなかで——外遊, 『婦人のこえ』と「婦人問題懇話会」を足場に
終章 過去を読み 未来を拓く

本書は、山川菊栄(以下、菊栄とする)の先行研究では「ふれられていない隙間を埋めようと試みた」(465頁) 著書である。そのため、従来の研究で当然取り上げられる史実の分析は、最小限に抑えられている。例えば、「母性保護論争」のようなトピックに関する考察の紙幅は限られている。その意味では、本書は「玄人」向きと言えるだろう。一方で、本書は全体を通してふんだんな脚注が付けられており、その内容は大変親切なもので、論考に深みを与えている。脚注には、読者が躓きかねない専門用語や人名に関して、かなり細かく説明がなされている。例えばジェンダー史や社会政策の歴史を専門としない読者が読んだとしても、ほとんど先に読み進めることが可能である。

以上の特徴を持つ本書の問題意識については、序章で、著者の研究者生活を振り返ったうえで次のように整理されている。①菊栄の《ベーベルの婦人論重訳完訳》の位置づけと《国際婦人デー》の歴史認識度、②菊栄の《クララ・ツェトキーンとコミンテルンの女性政策の撰取》はどのようなものであったか、③《マルクス主義・日本共産党との距離》にみる均との関係と《GHQ下での言動》である(27頁)。また、序章ではそのほかに、先行研究の整理とともに、資料の所在が示されている。以下、各章の内容を述べていこう。

第1章では、菊栄の出自や両親の結婚、時代的背景についてまとめられている。特筆すべきは菊栄の父・竜之助についての分析である。菊栄は、『おんな二代の記』を著しているように、

母親である千世への尊敬の念が強い。著者は、菊栄の生家に関する叙述についての特徴として、「本人も含めておおかたが目にするのは母方の系譜」であり、「父については、そのなかで付属的にふれられるという特徴がある」ことを指摘している（49頁）。著者は、菊栄本人の父に関する叙述から考察すると、父親が母方の青山家にとって「婿養子のつもり」で「経済問題」を解決することを期待された存在であったことを指摘する（63頁）。それにもかかわらず、菊栄が自分たちは「貧乏」をさせられ、母は父にとっても苦勞をさせられた、という印象を持っていることを、著者は菊栄の叙述から考察している（61頁）。このことについて本書では、まず、父がフランス語を習得し陸軍省の通訳を務めた人物であるとともに、「殖産興業」の波に乗った食肉製造技術のパイオニアであったことなどを取り上げている（51、55-56頁）。そのうえで、著者は、父親がいわゆる単身赴任のような状態で北海道庁に勤務し、その後も台湾など様々な土地に赴いて事業を行っていたことから推測すれば、たしかに子育てはすべて母にまかせきりであっただろうと指摘する（56-57、61頁）。ただし、菊栄の家が家事使用人を雇うことの出来るだけの生活を送っていたことから、「当時の庶民」と比べて「それほど困難さを強調されるべきことか」と疑問を呈している（61頁）。生計を成り立たせるという視点に立つと、母がいわゆる専業主婦であったことを考えれば、学費や生活費は父が稼いだと考えられ（59-61頁）、著者は「菊栄ほどの人物ならもっと客観的書き方をしてもよかったのではないかと、私は何とも『父』が気の毒に思われる」（63頁）という。

第2章は、菊栄が受けた家庭教育や学校教育、英語教育に関する考察である。ここでも著者は菊栄の父に着目し、彼が日刊『平民新聞』

を買ってきていた事実を取り上げる。それは、のちに菊栄の夫となる山川均が『平民新聞』の編集者だったからである。また、菊栄は英語に特化した最高の女子教育を受け、「高度のレベルで身につけた英語という盤石の武器に、菊栄は裏打ちされて」（89頁）いたと指摘する。

第3章は山川均との結婚に関する章である。結婚は1916年で、第一次世界大戦のさなかであった。著者は、菊栄が均から強い影響を受けていたと推察し、菊栄は均からマルクス主義を学んだと考えられると指摘する（108頁）。また、菊栄が、尊敬する母でさえあこがれていた留学の機会も棒に振ったことについて、「菊栄は、均を選び、米国留学を捨てたのだと思わずにはいられない」（109頁）と記す。そして均を選んだ菊栄は、第1次世界大戦を描いたドイツ語からの英訳の『大戦の審判』を猛スピードで翻訳した。この仕事での過勞が、結婚後の菊栄の病気を引き起こしたのではないかと著者は推測する（113頁）。さらに、菊栄はこの頃、自らを均に近い「マルクス主義的社会主义者」であると自覚していたとする（120頁）。

第4章では1910年代の思想と理論の形成について述べ、この時期の菊栄を高く評価する。その根拠は、第1に、社会政策学会研究会での報告の水準の高さであり、第2に早々とドイツ革命とその後を日本に紹介したことであり、そして第3に3冊もの単著を出版したことである。菊栄の傑出した評論である1918年の母性保護論争と同年に、菊栄は社会政策学会の例会で、弱冠28歳という若さで女性労働問題について報告を行っている。戦後再建された社会政策学会の初の女性代表幹事を務めた著者にとって、菊栄のこの偉業はとりわけ強い関心の対象であるという（134頁）。また、1919年に29歳の菊栄は、『解放』12月号で「最近の世界婦人運動」として62歳となったクララを紹介し

ている。著者は、結婚後3年間の、すなわち「菊栄20歳代の終わりまでの到達度は、見事というしかない」（159頁）とする。それを可能とした条件は、①英語という武器、②最高の教育、③トップレベルのマルクス主義社会主義者であった山川均という夫の存在、④当時の中流階級の慣例として家事使用人を置き、家事育児に忙殺されなかったことだと指摘している（159頁）。

第5章は1920年代前半の菊栄の理論活動の発展を記す。1919年にコミンテルンが創設され、その女性政策を日本では菊栄がひとり先んじて紹介し、その一部を実践に反映させた。重要な点は、菊栄が「社会主義諸派」から「第3インターナショナル」を区別し、第3インターナショナルが現実的・具体的な婦人政策を示して運動を展開していると評価した点だという（180頁）。1920年代の菊栄は、第2インターナショナル崩壊、ドイツ革命の頃である1918年から、クララが主導した（1921年～）1924年までの重要な時期について言及している（188頁）。さらに、菊栄は1923年にクララが提唱した「国際婦人デー」を日本で初めて開催した。菊栄は、日本女性でただ一人と言えるほどの水準で、当時のコミンテルンの女性政策の核心部分を把握していた（209頁）。なお、著者は、共産党弾圧のあった1923年は、6月以前と9月以降では全く別の情勢であったことも指摘する（203頁）。そのうえで、菊栄の日本共産党についての認識を考察する。

第6章はドイツのアウグスト・ベーベルの翻訳をめぐる問題について述べる。著者にとっての菊栄の印象は、ベーベルの『女性と社会主義』の日本で最初の邦訳完訳者という側面が強いという（222頁）。ただし、菊栄は英訳から重訳した。この章では特に、外国研究の研究者にとって、忽せにすることのできない、重訳の

問題について論じている。ベーベルは「ドイツ社会民主党」の創設者の一人であって、社会主義者鎮圧法時代を耐え抜いた「ドイツ社会民主党」のリーダーの一人であり、とりわけ婦人問題に造詣が深かった。『女性と社会主義』の初版は社会主義者鎮圧法実施下に出版された（224頁）。著者は『女性と社会主義』の翻訳が各国でどのような歴史をたどったかについて考察し、その国際的な翻訳の広がりの中に菊栄を位置づけた（231頁）。著者にとって、学生時代に学んだベーベルの邦訳完訳者が菊栄であること、やがて研究することになったクララの論考の最初の邦訳者もまた菊栄であったこと、そしてクララが提案し、ベーベルも支援した国際婦人デーを日本で初めて取り入れたのも菊栄であること、それらの歴史的つながりが、本書を刊行する動機になっているという（252頁）。

第7章は、1920年代後半からの労働婦人組織とその問題をめぐる諸発言が考察され、労働組合運動や政党にとって激動の時代であった1925年から1926年の菊栄について分析されている。ここでは、菊栄の「マルクス主義」や日本共産党についての認識とともに、評議会の婦人部テーゼのいきさつが分析される（265-280頁）。菊栄は1926年暮れより運動から離れ始めており、均とともに「労農派」を選んだ。菊栄は、日本共産党がゆがめたものではない「正統マルクス主義」を支持していたと著者は指摘する（300頁）。

第8章では、1928年以降「労農派」を選んでから15年戦争の終わりまでの菊栄について論じる。「非日本共産党系マルクス主義」を銘打っていた「労農派」の人々には、いわゆる1928年の「3.15事件」の被害は及ばなかった。また、菊栄は戦前では最も盛大であったと言われる1928年3月の国際婦人デーにも、既に関わっていない。そして1928年12月頃より運動

の第一線から退いている(305頁)。この頃、菊栄は高群逸枝との論争を行っており、世間から注目を集めた。高群はこののちに『母系制の研究』を著す女性史研究者であるが、高群がマルクス主義を理解していないことを菊栄は痛烈に批判した。著者は、この論争で、初めて菊栄がマルクス主義理論を正面から論じていると注目する(317頁)。

当時の社会状況から見た運動と研究の関係について、著者は、1926年より徐々に運動から離れていた山川夫妻が弾圧の外に身を置いていたことを、賢明であったと述べる。日本共産党と関係を切っていたことにより、夫妻には文筆活動の余地が残され、それぞれに「運動をまたその先へとつないだ」(335頁)とする。また、「戦時下の時代の、今日に残されている言論を、どうとらえるかは単純ではない」(341頁)と指摘し、先行研究では、菊栄が戦争や国策に協力したか否かという問いには見解が分かれていたとする(343頁)。著者は、鈴木裕子による、菊栄は「時局・国策・戦争協力への批判的姿勢を堅持した」という説が妥当と考えたと述べている(343-344頁)。

第9章は、戦後のGHQの女性政策と、それを受けた労働省婦人少年局長としての活動について論じる。著者は、GHQ占領政策下の菊栄は、結論から言うと「GHQの枠のなかで、それと歩調を合わせた日本社会党の範囲より外に出ることはなかった」と推測する(377頁)。それにもかかわらず、菊栄が労働省婦人少年局長のポストを追われることになるのは、占領政策が「冷戦の中での砦」として旋回するとともに、日本の政権もめまぐるしく変わったことにより、菊栄にとって「駆け引きの多い未知の政治の世界」を生き抜くことが至難の技であったからであろうと指摘する(380-381頁)。

また、菊栄は1916年に公娼・私娼問題で

華々しくデビューしたにもかかわらず、占領期に「特殊慰安婦施設協会」(RAA)が発足したのちに起こる事件や重大な局面に登場することはなかった(385-387頁)。さらに、菊栄は戦前日本最初の国際婦人デーをリードした人物であるが、1924年以降一度も直接に関わっていない(388, 394-396頁)。加えて、菊栄は当時、国際婦人デーの起源やいきさつについて史実とは異なる説明を行っていた。この点について著者は、共産党に対する態度に関してのGHQへの遠慮を感じさせると述べ、「占領下の『言論空間』は菊栄にも影響をおよぼし、その範囲でしか発言が出来なかったとしか説明がつかない」(402頁)と指摘する。この国際婦人デーの認識について、著者は、菊栄が局長を終えGHQへの遠慮が必要なくなってからも局長時代の説明を正さなかったことについて、批判を行っている。著者は「長い人生のなかで、人は、無知か故意かを問わず、間違ったことを書いたり、言ったりすることがあるのは避けられない。しかし、そのことに気づいたなら、どこかできちんと訂正しておかなければならない」と述べている(406頁)。著者は菊栄を論じるにあたり、批判的な姿勢を終始崩さない。それは、菊栄の言葉である「姉妹よ、まずかく疑うことを習え」を貫く姿勢である。特に第9章で論じられている国際婦人デーへのこだわりは、菊栄の言葉である「姉妹よ、まずかく疑うことを習え」の言葉である「疑う」に突き動かされた研究実践であると述べる(407頁)。

第10章は占領期以降の、日本社会党の女性運動と菊栄について論じ、菊栄の60歳にして初めての外遊などを記す。また、均とともに、社会主義への信念を持ち続け、「非共産党性」を強く押し出したことを指摘する(413頁)。なお、著者は菊栄と均との関係性について、夫妻ともに自立し、男女平等など共通の問題には

『均・菊相和して』論陣を張った見事なカップル(419頁)と評価しながらも、「夫唱婦隨的」平等を感じると述べている(420頁)。

終章で著者は、人物をとらえるためには「矛盾した側面も含めて、その全体像を把握しなくてはならない」(464頁)と指摘する。著者は、菊栄の孫・しげみの言葉に、菊栄は「ノー天気」で「ルーズ」という言葉があることを紹介し、菊栄は「小さなことに思い悩まないおおらかさ」や「柔軟性」があったのだと推測する(479頁)。菊栄は晩年に至って、「マルクスも男ですから」「やたらとマルクス主義とむすびつけて考えないでほしい」との言葉を残しており、それは「しげみの表現のような性格」でなければ言えないことだと指摘する(480頁)。著者は、菊栄はマルクス主義抜きには論じられない人物であるとしながらも、菊栄のマルクス主義との関係については、やはり「均あつてのマルクス主義者」であつたのではないかと指摘する(481頁)。

以上の内容を踏まえ、評者の感想を述べたい。まず、本書の分析は菊栄の生涯の順を追って展開するものの、「菊栄の生涯を描くいわゆる伝記ではない」(40頁)という特徴がある。そのため、菊栄の両親についての紹介から菊栄の均との結婚生活を描いた第1章から第3章は、伝記的印象のある章ではあるものの、その後の菊栄の著作や活動に影響を及ぼすであろう基本的事項をおさえることを目的としていて興味深かった。また、第5章は、クララ研究の第一人者でもある著者が、同じくクララ研究の先駆者とも言える菊栄のクララ研究の水準について分析した、興味深い分析視角を持った章である。ただし、門外漢にとっては、クララについての論点を理解しづらい側面もある。おそらくは著者の『クララ・ツェトキーン――

ジェンダー平等と反戦の生涯』(御茶の水書房、2018年)を併せて勉強することが求められる章なのではないかと思う。

さらに、本書は「客観的に菊栄を読み、評価する」書籍である(487頁)とされている。しかしながら、著者の菊栄の評価がいかなるものなのかが、菊栄に関して不案内な者にとっては掴みにくい箇所も多いと感じた(例えば第5章、第7章、第8章、終章)。本書における資料からの引用部分は大変豊富であり、また、他の研究者による菊栄評価についてはかなり詳しく紹介されている。よって、菊栄研究に通じた者にとっては、資料そのものの検証も可能であると考えられ、知的好奇心を掻き立てる大著である。ただし、著者自身の菊栄に対する評価は、文章の端々に滲ませるような筆致であり、明言を避けているように感じられる点もある。特に、終章の結びに関しては、他の研究者が行った菊栄評価を紹介して終える形をとっており、著者自身の菊栄評価を知りたかったという気持ちが残る。

ところで、評者は、戦前の総同盟や産業報国会に関わった女性労働運動家である赤松常子の活動や言説についての研究を行っている。その観点から述べれば、たとえ研究対象が既に逝った人物であったとしても(つまり、本人から反論をされるような心配がなかったとしても)、人物を研究対象にすることは緊張感のあるものだと感じている。それは、研究対象本人にはもう直接に確かめようのない思想や行動の理由を、極端に否定したり肯定したりすることなく、可能な限り史実に近い形で再現して評価し、読者に伝えたいと思うからである。ただし、研究者は対象とする人物に良くも悪くも「惹かれて」いるのであり、完全なる中立な立場に立つことは難しい。そのような人物の思想研究において、著者は、菊栄に「特別の思い入

れがあるわけでもなく、生前にお会いしたこともなく「門外漢」であることを前置きしており(3頁)、悉く「対象となる人物をつきはなして客観的に取り上げ」(45頁)ている。きっぱりと菊栄の「まずかく疑うことを習え」を貫く著者に畏敬の念を持つ。

最後になるが、本書には著者の研究人生の足跡が刻まれている。著者が大学院生の頃に北海道大学で開催された社会政策学会で、菊栄とかつて労働省の同僚であった広田寿子と出会ったことや(382頁)、これまでに他の研究者から受け取った評価への返答(253頁)、嶋津千利世や竹中恵美子をはじめとした、たくさんの研究者とのエピソードが随所に記されている。それは大変興味深いものである。また、研究者として生きていくための心得が、本書全体にちりばめられている。一例を挙げれば、選集を利用するときは、編者の関心によってテーマが選定されていることに注意し、「選集に収録されていない論考のなかに、これまで見落とされてき

たさまざまな、菊栄が見いだされることもあるに違いない」(35頁)といった指摘である。また、「研究者の名刺は、抜刷りですよ」という、著者の恩師である新川士郎先生のお言葉に(474頁)、新米の研究者である評者は背筋を伸ばした。戦後再建された社会政策学会において初の女性代表幹事を務めた著者の、研究者としての後ろ姿をたどることの出来る本書の凄みは圧倒的であった。

(伊藤セツ著『山川菊栄研究——過去を読み 未来を拓く』ドメス出版、2018年11月、626頁、定価6,500円+税)

(ほりかわ・ゆうり 新潟国際情報大学国際学部講師)

【参考文献】

鈴木裕子(2006)『自由に考え、自由に学ぶ——山川菊栄の生涯』労働大学

鈴木裕子(2015)「自著紹介 山川菊栄から学ぶ」『ジェンダー研究21』早稲田大学ジェンダー研究所紀要 Vol.5, 90-93頁